特集に際して
Guest Editor

海中工学研究センター特集号

浦　環*
Tamaki URA

沈没船やロケットの引き上げ，大陸棚問題，EEZ境界付近の海底資源問題，東海・東南海・南海地震発生の可能性，あるいは11,000 m深度まで潜ることのできるROV「かいこう」の亡失など，良くも悪くも海中に関わる話題はつきない．

1999年4月に10年の時限にて海中工学研究センターが設立されて半ば5年が経過したが，このような背景にあって，センターの旗印のもとに研究活動はますます活発化している．そこで，所属する研究室の最もホットな研究トピックスを集めて特集号を組み，海中工学の最先端を紹介しようと考えた．

2004年11月現在，センターは次の5つの研究室から構成されている．

・浦　研究室：海中ロボット学
・浅田研究室：海洋音響システム工学
・高川研究室：海中海底工学（客員）
・林　研究室：海洋環境工学
・藤井研究室：海中工学研究センターバイオメカトロニクス

このうち，浅田研（2000年4月発足）以外は設立当初からの研究室である．また，

・浅川研究室：海中工学計測学（客員：1999年11月～2002年5月）
・Bahl研究室：海中信号処理工学（客員：2002年7月～2004年7月）

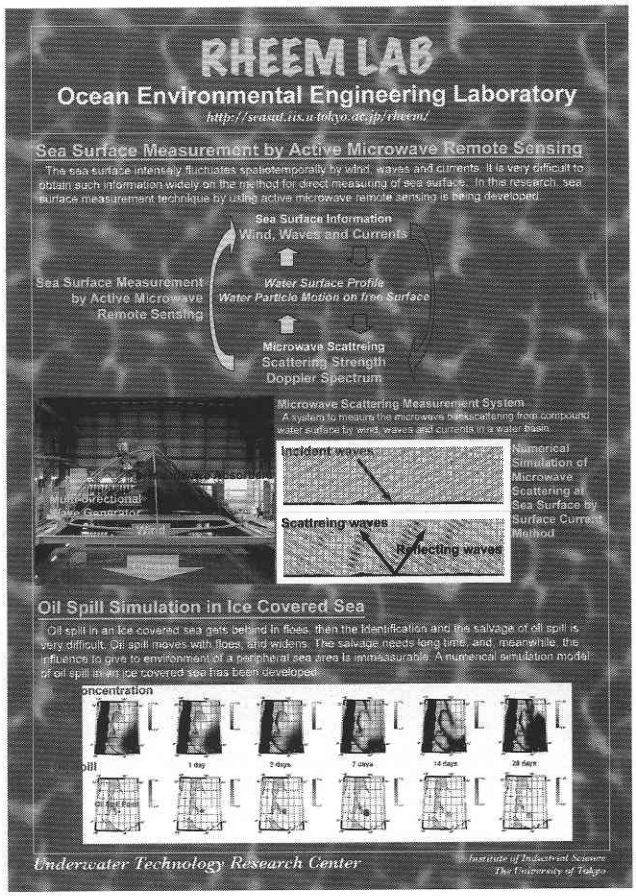
が客員教授の研究室として活動をおこない，センターの研究の幅を広げた．

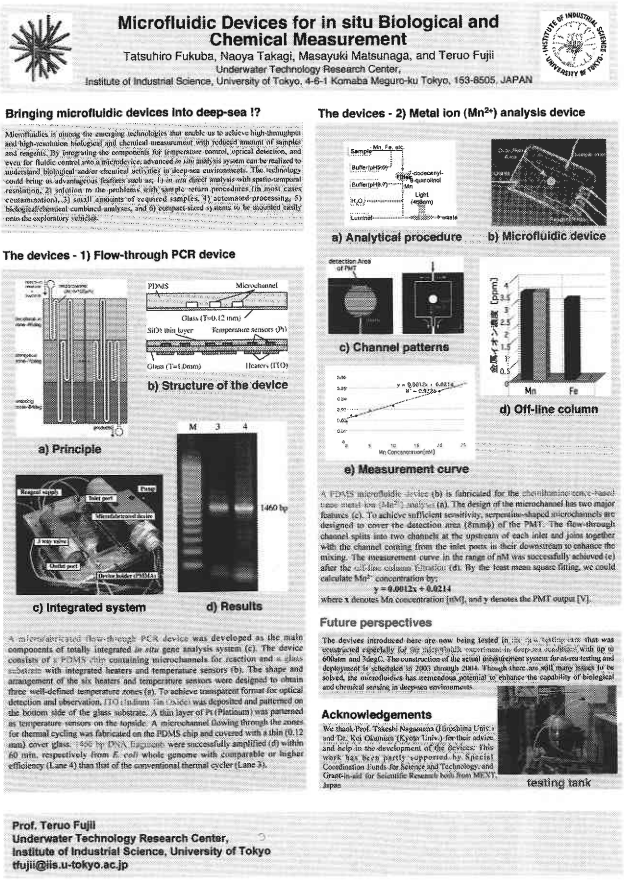
海洋工学における研究分野は広く複雑多岐にわたっている．本センターでは，自律型海中ロボットの研究開発を柱に据えて，広く海中環境全体を考えていく，という視点により研究室が構成される．このようなシステムは他に類を見ないものであり，他の組織ができない新しい研究分野を切り開いていく可能性を持っていると自負するところである．

2000年，2002年には，センター主宰による国際会議「International Symposium on Underwater Technology」を開催．同国際会議は，2004年4月には台湾で開催され，また，2004年11月の神戸での国際会議「OCEANS/Techno-Ocean 2004」へと発展している．これらの国際会議は，生研国際シンポジウムとして開催され，高い評価を得ている．他の多くの方々にも，本特集号により海中工学研究の次の時代を想像していただきたいと思う．

OCEANS/Techno-Ocean 2004での
海中工学研究センターの展示ブース

*東京大学生産技術研究所　海中工学研究センター長





OCEANS/Techno-Ocean 2004での海中工学研究センターで展示した4つの研究室のポスター